

運動とイメージに関する実験研究

松本 千代栄

はじめに

現象性の文化—舞踊を研究対象とする舞踊学にとって、作者=作品(演者)=観者の関係を把握し、表象と享受のメカニズムを客観的に明らかにすることは主要な研究課題の一つであろう。

ここでは自研究に視点において研究過程を辿り、研究の着眼を研究法を中心に、シンポジウムの課題「運動とイメージに関する実験研究」を考える資料を提出し、舞踊研究の現在を論じる一石としたい。

舞踊を対象とする実験的実証的な研究姿勢は、先ず、①個人によって直接に認知体験されている現象的場 phenomenal field (認知論的立場)——ありのままの経験的事実を客観的にとらえ、客観化した内容を現象的場へかえすことを予想し、②人間の共通感覚をふまえて、共有できる美的原理を操作的に求め、舞踊の楽式論 the Code の形成に備え、③確かな受け渡しのできる研究法と研究成果の集積をねがって、実験——実証を積み重ねてきたと言えよう。

「舞踊に関わる言語」によって、舞踊を把握しようという研究的接近は；

《舞踊の作品像》——全体像に対する接近を、端緒としている。先ず、

調査研究——“舞踊の経験に関する調査”を実施し、社会環境の異なりによる舞踊経験の差異、舞踊題材に対する関心の差異性と類同性を明らかにし、更に“舞踊主題——題名分析——”によって、舞踊専門者が選択した作品題名の様相——対象範囲、年次変化、個人差などを明らかにしている。

これらの研究結果からは、「題名 Title」⁽¹⁾に表われた美的関心は；

- I 自然(地勢・気候・季節、自然現象、動物、植物)
- II 生活事象(スポーツ・遊戯、人物・作業、科学物質)
- III 芸術と思想感情(夢・物語、音楽や諸芸術、思想感情、抽象概念)

の諸領域に亘り、地域、性・年齢、個人差による異りをもちつつ、題名選択の結果からは、学齢、専門家を問わず、舞踊は広汎な人間体験を内包する表現であることを言語上に証していると認められた。発想を具現する「題名」は現象性の表現を

コミュニケーションし、舞踊作品の総体を表象する言語化として、作品の存在を保証する堰として、舞踊に関わる主要言語の一とみられよう。

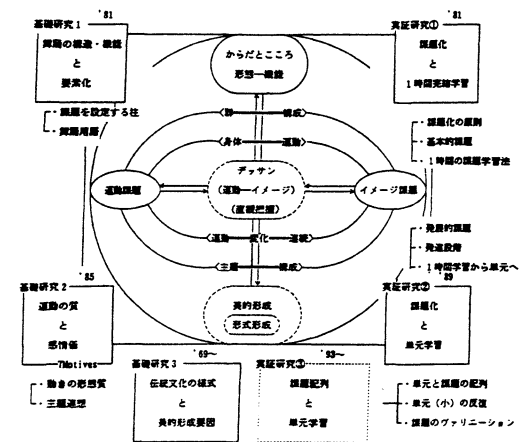
次に実験研究として「舞踊の鑑賞」「舞踊の創作・鑑賞能力の発達」を操作的にとらえた研究においても作品の全体像の発現と享受のメカニズムを見出している。「題名」を伏せて作品鑑賞を行い、観者が題名を付与する実験では、所与の題名に類同する題名の他に、写実から心象までの多岐に亘る題名が観者によって付与され、舞踊作品は観者の個人的傾性の入りこむ余地の大きい、可塑性を有する表現体であると認められ、「題名」の果す意味と役割の重さが推定された。

しかし、同時に実施した、作品の鑑賞後に作品にふさわしい「感情語」を選択する実験結果からは、共通の情調の用語が高い頻度で選択され、ここからは、作品全体像としてより表層に明らかになる個別の感情傾性と、表現の基底に潜在して素型化をはかる運動=感情の型の二層が働いて舞踊運動の構造化がはかられており、これらは、言語上に操作・弁別され得ると推測・仮定された。

これらの結果をふまえて、《舞踊の構造・機能》に関する一連の実験・実証研究を継続実施した。

別表に示すように、近年の研究は、教育科学の成果を実践の場へつなぎ、その実証を経て、更に必要な基礎資料を求めるという基礎研究=実践・実証研究の相互作用の中に進めてきた。

ここでは、実践・実証研究の側の成果は別の機において、実験的・操作的に進めた研究の側に視点をおき、手続と結果を概観したい。



動きとイメージの連合を舞踊研究の原初かつ根源の問題とみて、言語（舞踊用語）と運動（舞踊運動）の連合に働く諸機能を操作的に検出した過程と結果である。

I 舞踊の構造・機能に対する接近

舞踊の構造・機能を、言語上に把握しようとする研究は、「全体として一つの構造をもち、そのいかなる部分も全体との関連で機能をもつ」という構造・機能的な考えを前提として、対象における構造の存在を仮定した上で、その構造を明らかにしようとする方法をとっている。即ち、部分の相互関係を考慮に入れた統一的全体を舞踊の構造とし、個々及びその統合の作用を機能とみて、互いに関連しながら全体として一つの体系を形成する関係を操作的にとらえ、検証しようとするものである。

文章法が、真の思考の単位は、文字や単語ではなく、文章であるという考えをもつのに等しく、舞踊の全体像を見失わず、細部と細部の役割と関係づけを求め、行動文化としての生きた働きを見出そうとしている。

1) 舞踊用語に関する研究

舞踊の構造・機能に関する研究的接近の第1は、「舞踊用語」の収集・分類から始まっている。研究Ⅰ⁽²⁾およびⅡ⁽³⁾では、舞踊の研究・教育著書国外（米・英）、国内から各5著 計10著を対象とし、舞踊運動が作品へと創成される過程に関わる用語に視点をおいて用語を抽出した。（用語総数（国内）1399語）

それらは以下に示す項目に分類されている。

- A. 全体に亘る語
- B. 細分化された語
- C. その基底の働きをする語

分類項目⁽⁴⁾と例示は以下のとおりである。

(I) 身体に関する用語

—舞踊の実現として働く身体に関する用語—
例；舞踊の身体、身体部位、身体機能、感覚など

(II) 基礎的な身体運動に関する用語

—身体を表現媒体に改変させる基礎的な身体運動—
例；舞踊運動、自然運動、日常動作、身体意識、運動感覚、運動の質など

(III) 舞踊運動形成に関する用語

—身体運動を舞踊運動として表現形成するための働きの用語—
例；空間意識、空間支配、空間構成など

(IV) 作品形成に関する用語

—作品創作過程及び美的感情をはこぶ創作作品

化に用いられた用語—

例；リズム、流れ・時・空・力性、創作過程、動機、美的判断 など

(V) 美的原理に関する用語

—舞踊の美の視覚的、空間的、運動的時間的関係を支配する美的形成原理の用語—
例；変化と統一、様式、形式 など

(VI) 上演、演出に関する用語

—舞台上演にともなう企画、演出、演技、効果に関する用語—
例；演出、音、照明、衣装、美術 など

(VII) 教育、学習指導に関する用語

—舞踊学習にかかわる学習・指導に関する用語—
例；目標、技術、評価、個性、環境 など

(VIII) その他

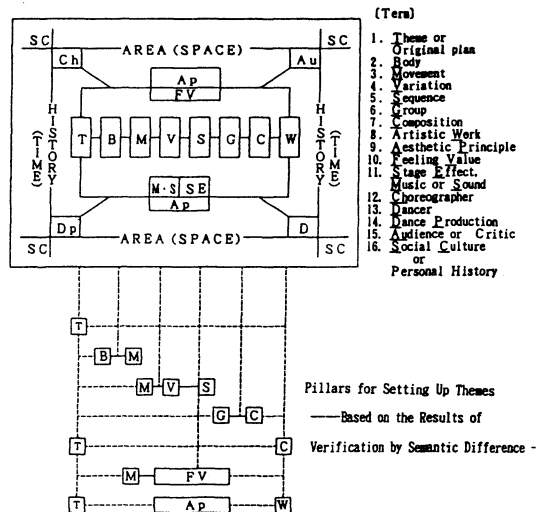
—他の舞踊形式などの関連分野の用語—

次に、これらの舞踊創作に関わる用語の抽出と分類をふまえて、舞踊の構造・機能の図式化を試みた。

2) 舞踊の構造・機能の図式化⁽⁵⁾

図式は、Fig. 1 に示すように、作品形成に含まれる要因（主題T—作品W）を中央に位置づけ、それらにかかわる情調Fv、音や美術などの効果M・S、S・E及び美的形成に働く美的要因Apを周辺に配して囲み、作品の総体を示している。更にその外部に作者Chと作品の実現者としての演者D、また上演の場Dpと観者Auを配して、作品の実現と受容の場の働きを示している。更に視点を広げて作品＝鑑賞の場を包摂する時間Time or History、空間Space or Areaを示し、舞踊の時空

Fig. 1 Factorial Design of Dance — Structure & Function



性を捉えつつ、作者＝作品＝観者、即ち人間存在の営みが、地域と歴史の中に在り、個は（個によって出現された作品を含めて）当代に生きた社会的個としての実在であることを示している。各コーナーに配した社会文化、SCは、その意味で作者・観者の個人的傾性を包容しつつ、より永続的な人間文化の形成＝衰退過程とその所産を享けての当代の個の存在と作の創出であることを示している。

3) 図式の検証——舞踊批評文の意味微分——

上述の舞踊用語の収集分類——帰納、演繹の手続に推論を加えた「舞踊の構造・帰納の図式」の仮説設定は、果して妥当性をもつか、また、図式化の意味は何かを検出するために、次段階として、「舞踊批評文」を手掛りに文章の意味微分を行い、“言語をもって舞踊表現の存在を实在させ啓発する”批評文が、この図式に示された構造・機能を容認するか否かを確かめた。

検証の方法は、凡例に示すように、批評文の文章分析を行い、意味を微分することによって、何を対象に、どのような働きが言語上に認証されているかを明らかにし、その項目内容と図式とを比較対照し、図式の構造・機能上の要因と相互の連関を検出し、評定する手続をとった。

凡例の具体に触れると、Fig. 2に示すように、批評文の本文を文章毎にカード化し、加線を加えて意味を評定し、複数の評定者により適否を正しつつ、批評の指摘する対照とその働きの弁別をはかっている。

収集された舞踊批評文の記事総数1765篇その内、現代舞踊系543篇の中、Modern Dance対象の批評文284篇（執筆評論家 12名）の文章分析である。

結果として、文章中に用いられた用語の同類を集めた代表語（5語以上の項目をもつ）とその頻度は下表のとおりである。（用語総数2811語）。図式に掲げた項目は、批評文の代表語によって先ず認証されたとみられよう。

1	T	主題	98	6	D	演者	341
2	M	運動	185			踊り技術	59
3	G	群	35	7	Au	観客	189
4	C	構成	382	8	Dp	公演	
		振付	130	9	Ch	作者	
5	W	作品	620	10	M·S	効果	145
					S·E		162

次に、各項目の連関——意味微分に表れた機能（Fig. 2「意味微分例」参照）は、主として以下の

要因の連合として文章化されていることが明らかになった。例えば、

身体－運動	B－M	（凡例1）
運動－変化－連続	M－V－S	（凡例6, 9）
群－構成	G－C	（凡例10）
主題－構成	T－V－C	（凡例11）
運動－情調	M－Fv	（凡例5）
主題－美的形成	T－Ap－C	（凡例12）
作者－演者－（観者）	Ch－D－（Au）	（凡例19）
公演－社会文化	Dp－（W）－SC	（凡例22）

などであり、これらの連合の結果は、批評文の言語表現、即ち、鑑賞の側からの部分・全体関係及び機能の認知として、仮説的に設定した「舞踊の構造・機能の図式」を保証し、その妥当性は立証されたと認められる。（Fig. 1の下部参照）

これらは作品鑑賞のメカニズムとしてのみならず、作品創作の文章法として創作の場にも還元できる構造・機能の図式と推論される。（ここでは触れられないが、これらの図式の構造・機能から課題化を行い、創作における独自性を前提としつつ問題解決学習 Product Methods を実践し、実践上に舞踊の構造・機能の図式と創作学習の有効性を確かめた実証的研究がある）

次に、これらの意味微分から作品化の全過程に関わる「運動と情調」M－Fvの連合をみた基礎研究について論を進めたい。

運動と情調の連合は、舞踊の核心の問題の一つであろう。

II 舞踊運動と感情語の連合に対する接近

前述の研究において、図式上に「情調」Fvと示された感情語は、身体や運動が常に感情のともなった体験として鑑賞される——即ち、動きは単なる動きとしてではなく、人体としての運動をこえて、感情の価をもって享受されることを証しており、それらの享受は最小限の動きの単位M－Fvから、一連の動きM－V－Sに、また、演者相互にかかわりを増す群、G－C、作品の完成T－Wに到る各段階において、運動と情調は相互に呼応しあい相乗を計りつつ、結果として作品の情調W－Fvを強化し、最終の実現に到っていると認められた。

これらの、運動をそれ以上のものとして価値づけられる機能——「動きの感情価」（あるいは鑑賞価）——舞踊運動と感情の連合の基本的な様相をみる実験的接近は、以下の階梯をもって実施した。即ち、

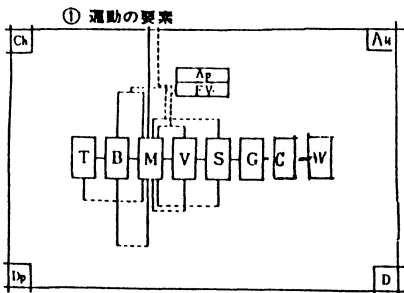
I 運動が1つの表現質（運動の質）を獲得する最小限度のまとまりの長さ条件、即ち、Motiveを仮定し、

Fig.2 用語抽出及び意味成分

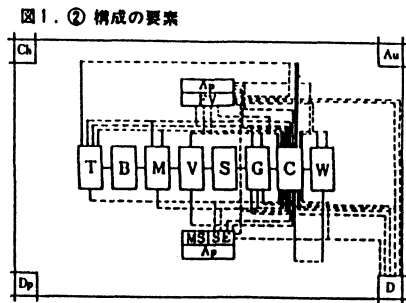
【凡例】

<p>1</p> <p>からだのどこかに縮んだものをのこしておきながら、スピーディに<u>動く</u></p> <p>動き (身体 — 運動)</p>	<p>9</p> <p>ダンサーたちは、この<u>フレーズ</u>を繰り返しながら、円環をなし円環をつよくする。すなわち、<u>空間を閉じる</u>のである。</p> <p>フレーズ(運動-連続-変化)</p>	<p>12</p> <p>技術が技術として成立するためには、その<u>部分</u>を存在たらしめる<u>全体</u>が明らかにされなければならない。<u>部分が全体を包み</u>、またその<u>全体に部分が支えられ</u>るという<u>関係</u>が創り出されねばなるまい。</p> <p>部分・全体(構成-美的形成原理)</p>
<p>5</p> <p><u>動き</u>はかなり<u>激しい</u>ものの連続だが、空間全体は<u>静寂の気</u>で満ちている。</p> <p>動き(運動-連続-情調)</p>	<p>10</p> <p>グループ毎に異った<u>シュマン</u>を描くかと思えば、<u>一斉にレンク</u>ロナイズする<u>ハキレ</u>のよい群舞がすばらしい。</p> <p>群舞 (群 — 変化)</p>	<p>19</p> <p>ダンサーの個性をうまくひき出すという点では、なかなか<u>才能</u>のある振付者だと思ふ。</p> <p>振付者(振付者-作品) 廣者)</p>
<p>6</p> <p><u>速くて小さい緊張した動き</u>に対して、<u>遅くて大きい動作</u>や<u>弛緩</u>、<u>拡散</u>、<u>解聚</u>と呼ばれる<u>筋肉の質感</u>を欠く。</p> <p>動き (運動 — 変化)</p>	<p>11</p> <p><u>主題の再現</u>は、<u>単純から複雑へ</u>と<u>展開</u>してゆく<u>構成</u>であるべきだ。</p> <p>構成(主題-変化-構成)</p>	<p>22</p> <p><u>質の高さ</u>と<u>ポピュラリティ</u>が、ほどよく<u>つり合った</u>良い<u>公演</u>だった。</p> <p>公演(公演 — 社会文化)</p>

【意味の成分例】



- T-M 動きはいわば主題から極端に遠い地であり、
- D-M 腹部を両手で覗きつけ
- B-M-FV 胸の動きが痛快
- M-V 静かにゆっくり屈曲するダンス
- M-S 常に同じ形で反復
- M-FV ハードな動き



- T-M-C 「花が散る」といった動きを増してゆくパリエーションを中軸とした巧みがある
- T-C 「オセロ」を14人の主演者のみによって(他にコロスが登場)その心の高麗を浮彫りにする
- C-V-FV 3人の静かな感じの踊りで始まり、それぞれのソロ、激しい盛り上げと続き、短いエピソードで幕となる
- G-C-D 彼自身が狂喜まわしにまわり、他のコンビがおになる。それを14人の群舞がかこむ
- W-C 前半と後半とに分かれている
- C-FV 全体は古典的な構成
- C-Ap 全体は四重から成っていて、それぞれがひとつのエピソードを形づけている

Figure 3

Check List 1

1. Speedy	スピードのある
2. Accented	アクセントのある
3. Irregular	不規則な (不均等な刻みの)
4. Straight	直線的な
5. External	拡大的な
6. Balanced	バランスのとれた
7. Strong	強い
8. Heavy	重い
9. Sudden	急変的な
10. Slow	ゆっくりした
11. Smooth	なめらかな
12. Regular	規則正しい (均等な刻み)
13. Curved	曲線的な
14. Internal	縮小的な
15. Unbalanced	アンバランスな
16. Weak	弱い
17. Light	軽い
18. Gradual	持続的な

Check List 3

1. Abstract	抽象的
2. Religious(Symbolic)	宗教的 (象徴的)
3. Sensible	感覚的
4. Fantastic	幻想的
5. Dynamic	力動的
6. Constructural	構成的
7. Visual	視覚的
8. Technical	技巧的
9. Natural	自然的
10. Realistic	写実的
11. Lyrical(Emotional)	叙情的 (情緒的)
12. Dramatic	劇的

Check List 2

1. Light	軽快な
2. Cheerful	明るい
3. Happy	楽しい
4. Soft	やわらかい
5. Gentle	やさしい
6. Flowing	流れるような
7. Sorrowful	悲しい
8. Dark	暗い
9. Sticky	粘った
10. Natural	さりげない
11. Daily	日常的な
12. Ordinary	普通の
13. Stabilized	安定した
14. Dignified	威厳のある
15. Profound	重厚な
16. Hard	かたい
17. Cold	冷たい
18. Mechanical	機械的な
19. Dynamic	躍動的な
20. Forceful	迫力のある
21. Vast	大きな
22. Gay	賑やかな
23. Excited	興奮的な (苦しい)
24. Humorous	ユーモアのある
25. Graceful	優美な
26. Splendid	華麗な
27. Warm	暖かい
28. Calm	静かな
29. Lonely	寂しい
30. Feeble	弱々しい
31. Unaffected	自然な
32. Untuffed	落着いた
33. Simple	単純な
34. Solemn	厳かな
35. Sacred	神聖な
36. Deep	深い
37. Sharp	鋭い
38. Threatening	威嚇的な
39. Aggressive	攻撃的な
40. Rejoicing	歓喜の
41. Brave	勇壮な
42. Lively	生命感あふれた

Figure 4. Distance between the Hipbone and the Floor.

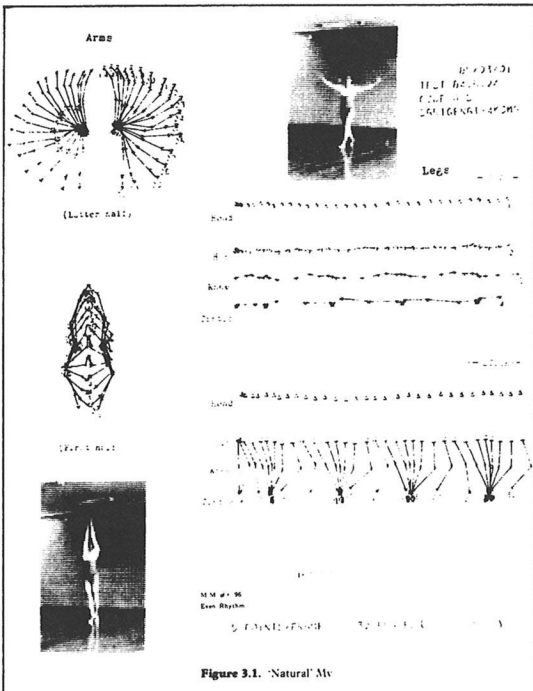
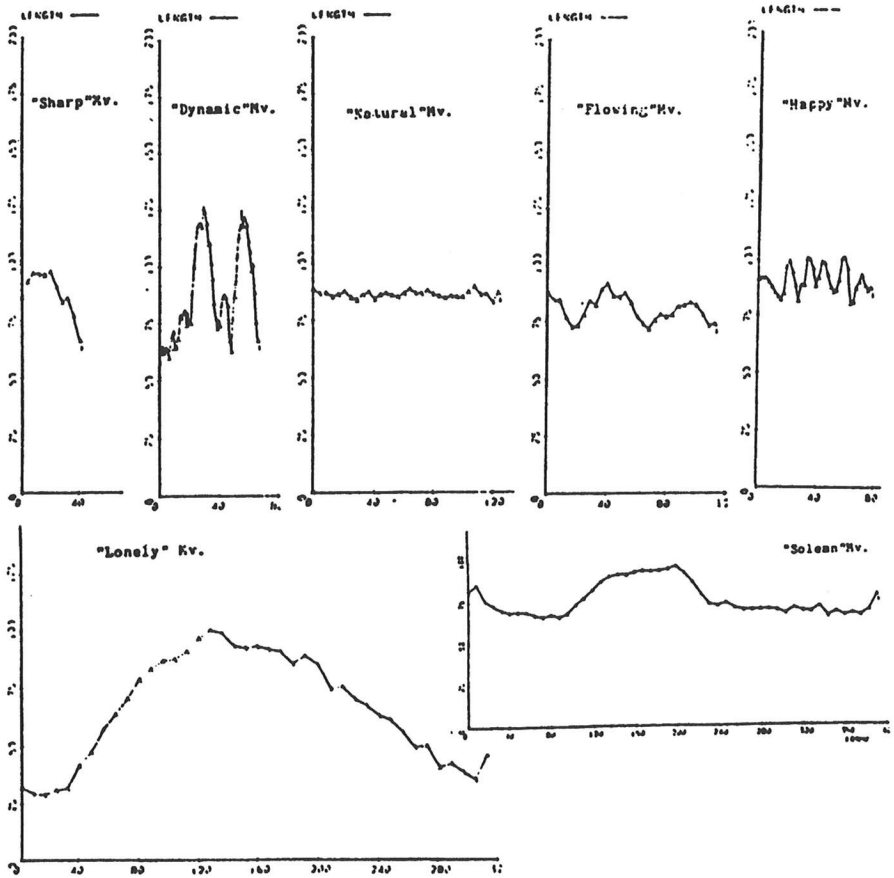


Figure 3.1. 'Natural' Mv

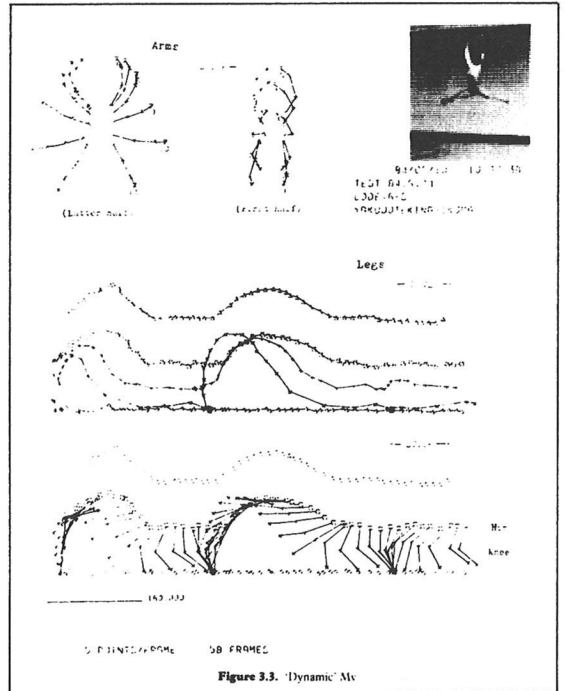


Figure 3.3. 'Dynamic' Mv

をみる check list ②では、42語から Motive に適合する3語(順位づけ)を選択させ、1人当り抽出頻度及び各 Motives の当該語群と他6語群からの選択数とを比較した。7種の Motive はすべてその代表語の属する同一語群内の語を最多選択する結果(太線かこみ)をみせている。(Fig. 6)

5種の Motives (Dynamic, Sharp, Happy, Flowing, Natural) は、各当該語群選択数と他6領域語選択数の間には、危険率1%未満で有意差が認められている。持続性、内包性を共有する Solemn, Lonely Mv. についても、Solemn Mv. における“厳かな”語群からの語選択と“寂しい”語群からの選択数、また Lonely Mv. における“寂しい”語群からの語選択と、“厳かな”語群からの選択数には、 <0.1 で有意差が認められ、2つの Mv. の異りは認知されていると認められる。

これらの結果から、作成した7種の Motives は、代表語に代表される感情語群に対応し、各代表語領域内の感情語の情調を内包しつつ、運動の感情価⁽¹⁰⁾ F - Quality を確立しているとみなされた。以上の結果から、

7種の Motives の動きの識別と、42語の感情語群の選択上に見る連合からは、有意差をもつ連合域が認められ、Motive は最小限の運動の中に、明らかに他と識別しうる特定の感情価を内包していると認められた。

これらの舞踊運動と感情語の連合をふまえ、Motive の内包しうる感情の域を確かめるために、より自由な連想実験を追加した。

2) Seven Motives と舞踊主題連想

check list ①・②の実験と日時を別にして、同一対象に、各 Motives の映像鑑賞を行い舞踊主題の自由記述を実施した。(各 Mv. 観賞後4分の制限

連想時間) Fig. 7 に示すように自由記述の舞踊主題は多彩にひろがり、各 Motives の鑑賞から想像的・創造的思考はスムーズに拡がり、Motives は、連想を拓く動機づけとしての性格を保有すると認められた。

各 Motives からの連想主題は、Happy134, Flowing105, Loneley101, Natural106, Solemn136, Sharp120, Dynamic103と量的な思考の円滑さを示すのみならず、質的にも、重なりを有しつつも各 Motives 独自の連想をひろげ、主題連想は、現実の想起から思想感情、抽象思考に亘り、明暗・興奮と沈静・宗教的感情など人間存在の豊潤の内面と個性を投影して主題化されていると認められた。Motive の柔軟な可塑性は主題言語上に明らかとみられよう。(Fig. 7)

以上の check list ①, check list ②, 及び舞踊主題の自由連想の実験を通して、

最小限の表現単位としての最もシンプルな舞踊運動 Seven Motives は、各 Motives と対応する感情語群との正の連合において、人間の共通感覚の働きを運動=感情語上に証しており、最小限の Motives は、同時に限らない人間の思想感情域と個別性を啓発する契機としても機能し得る特質を備えていると認められた。

この意味で“運動とイメージの連合の範疇”たり得るものとして、Paradiam of Movement and Image—7 Motives (C. M.) と名付けている。

最小限の単位に投影される人間存在のすばらしさに瞳目しつつ進めた実験過程であった。

3) 補追— check list の相互連関

check list ③については、CHHAIL の事例をあげておきたい。

check list ③ S - Tendency は、①②に比し、舞

「舞踊主題」の連想

N=23 (学生17, 院生6) 用語総数 805語

	美しい (134)	流れるような (105)	寂しい (101)	さりげない (106)	厳かな (136)	鋭い (120)	躍動的な (103)
1	雪が来た(4) 12+ [9]	大きな木に風が吹く 9+ [6]	誕生(2) 6+ [5]	無関心(3) 12+ [6]	祈り(10) 21+ [9]	機械(3) 9+ [7]	飛翔(2) 8+ [10]
2	一面の花 8+ [2]	流れゆく 7+ [6]	心のもつれ 5+ [3]	目々 6+ [6]	神聖(2) 9+ [10]	ロボット(5) 6+ [3]	大空 5+ [2]
3	喜び(4) 7+ [1]	花畑の思い 5+ [4]	芽ばえ 5+ [2]	我道を行く 6+ [1]	大地 6	壁(2) 5+ [8]	光り輝く瞬間 4+ [3]
4	雪が雪だ 5+ [6]	ワルツ(3) 4+ [3]	大地より 4+ [1]	この頃は私… 5+ [1]	時を超えて 4+ [3]	攻撃(5) 5+ [8]	迫力 4+ [5]
5	お祭(3) 5	恋する乙女(2) 4+ [3]	花開く 3+ [6]	歩いてゆくと 4+ [6]	深産 4+ [2]	針(3) 4+ [3]	それ行け 3+ [7]
6	美しいな 4+ [8]	夢うつつ 3+ [6]	壁(2) 3+ [4]	流れゆく時 4+ [1]	誕生(2) 3+ [8]	鋭い刃 4+ [3]	嬉しいっ! 3+ [4]
7	去をうけて 4+ [7]	春の恋 3+ [3]	泣いている木 3+ [3]	普通の人々 3+ [4]	やわらかい空風 3+ [5]	兵士の行進 4+ [2]	今・生きる 3+ [2]
8	華やかな王后 4+ [6]	ころがる水玉 3	後悔(3) 3+ [2]	平凡に 1+ [6]	天の彼方に 3+ [2]	樹氷(2) 4	河をとびこえる 3+ [1]
9	草原に遊ぶ 4+ [4]	らせん 2+ [4]	玄流陣人 2+ [3]	死の道 2+ [3]	心のつやがき 3	郵会(2) 3+ [5]	高さにあこがれ 2+ [3]
10	ぼんやりみよう 4	優しい私 2+ [3]	優しい私 2+ [3]	目覚めてみたら 2+ [1]	望みを 2+ [6]	突きさす(2) 3+ [1]	遠いかけて 2
その他	夢の中・夢心地・意識の 夢・空っぽい・虹をわ た	白いドレス・ドレスを着 て美しい思い出・思い出 ・いい香り	もう1つの顔・バラシェ ートがおちてくる・ため らい・耐える	ここはどこだ・生の神秘 …永遠・宇宙の無限・静 寂・静	母・恋愛・献身・とらわ れの民・大木・車の横・ 恋・見えない手	錠・時間麗守・プレッシ ャー・辿りくる何か・冷 たい気持	早くおいでよ・乱・魔法 のくつ・よみがえる・明 日は・踊る動物

※ 同一語数+ (同領域語数)

踊表現のより全体的な表象の把握に用いられている。いわば象徴的な用語である。その意味では作品の作風 mode を評定している語ともみられよう。

check list ③を用いた先行研究では、創作作品の作風と享受を明らかにした事例⁽¹¹⁾があるが、ここでは、CHHAU の比較⁽¹²⁾によって、check list ① (M-pattern or B-M code), check list ②, (F-Quality or M-V-S code), check list ③, (S-Tendency = T-W code) を併用し、感情価の基層と表層の関わり及び全体印象を、感情語群上にみた事例を掲げておきたい。

CHHAU の二つの演目は、用語選択上に明瞭に区別されている。即ち、M-pattern では、“流れるような”、“ゆるやかな”、“曲線的な”演目と、“スピード感のある”“アクセントのある”“緊張した”(強い)演目とに弁別され、F-Quality では、“やわらかい”“優美な”“表現的な”演目と、“鋭い”“迫力のある”“躍動的な”演目として弁別され、全体印象 S-Tendency では、“叙情的”“幻想的”な演と“力動的”“宗教的”な演として全体像を異にしつつ、二つの演は、古代神話の源を共有する演として、用語選択上にも“神聖な”F-Quality と“幻想的”“劇的”な作風 S-Tendency を共有していると読みとれる。

これらの用語上の連関は、更に追跡研究を必要とするものであるが、静動の異った構造化の情調を対比的に平面上に示す弁別結果は興味深い示唆を含んでいると思われる。即ち、舞踊においては、「静」も「動」の中とみられるが、用語群の類別上にみる静動のはこびの様相は、1つの演目の弁

別を超えて、文化の基調としての様式 mode にも check list 上に接近できることを暗示していると做されよう。今後に俟ちたい問題である。

おわりに

7 Motives の追跡研究は、佐藤、松本によって Analytical Approach to the Abilities of Dance Performers, (Proceedings of the JYVASKYLA congress, 1987) として Seven Motives の範疇が、ダンサーの熟練未熟練をみる評定尺度としても活用され得る結果を示し、島内、安村、西によって「運動の質と感情価の追跡研究」として、“舞踊作品における Motives の機能”や“形成要因”が追跡され (1992)、三宅、佐藤、細川による「舞踊技能の上達と美的判断に関する研究」1993などによって、範疇の意味と役割が再確認かつ再発掘されつつある。

また、舞踊創作学習の内容として多くの実践上に創作の動機づけや作品化に役立てられている。

「運動とイメージの連合の範疇」としての 7 Motives は、実験対象としての運動 Motives を映像上に明確に残し、また check list として感情語表を提出して、追跡研究及び活用を可能にしている。

今後、より多くの例証、また補正を得て、冒頭にねがった舞踊の楽式論の成立に資するものとなることをねがっている。

引用文献

- (1) 松本、舞踊の主題、「ダンス学習指導全書」第3章 大修館書店1980
- (2) 松本、山田、辻元；舞踊用語に関する研究 I (舞踊学会 '76) ダンスワーク20
- (3) 松本、山田、本間、名須川、大熊；舞踊用語に関する研究 II 舞踊学——2, '79
- (4) 松本；舞踊用語、前掲書(1)資料篇
- (5) 松本；Problem Situation and Learning of Problem Solving, Proceedings of IAPESGW '77
- (6) 松本；厚母、佐々木、桑原；舞踊用語に関する研究 III, 舞踊学——4, 1981
- (7) 松本；Quality of Movement and Feeling Values, Proceeding of IAPESGW 1985
- (8) 松本；舞踊研究；運動の質と感情価、日本女子体育連盟紀要 '87-1
- (9) 松本；運動の質と感情価 (16ミリ及び VTR) 日本女子体育連盟1985
- (10) 松本；ダンスムーヴメントと情調「ダンスの教育学」第1巻4章 徳間書店1992
- (11) 松本；本間；舞踊作品研究—事例研究、舞踊学——3, 1980
- (12) 松本；Movement and Symbol—A comparative analysis of CHHAU dance styles, 「Dance and Music in South Asian Drama」The Japan Foundation. 1981

*1992年度秋季第34回舞踊学会『舞踊學』第16号より転載

Fig. 15 Scale of appreciation values

